

## 【シンポジウム：「21世紀の近代化」を考える】

### はじめに

#### 第2部シンポジウム・コーディネーター：的射場 敬 一

2016年度のシンポジウムは、2016年11月24日（木）の午後2時半から5時半まで、1部の基調講演と2部の博士の学位取得者によるシンポジウムという二部構成によって開催された。主催は政治学研究科、政治研究所は共催という形でコミットした。よって、この企画立案、そして、運営の裏方などすべては、平石研究科長と上村研究科主任の多大なる労力によってなされた。

シンポジウムの趣意書に、「平成27年度は4人もの博士号授与者を輩出することができたので、その労を称えるとともに、政治学研究科の発展を祝して4人を中心としたシンポジウムを開催する」と記されていることから分かるように、この春、政治学研究科は同時に4人の博士を輩出した。画期的なことである。彼らの労を労い祝すと同時に、この4人に続くように、他の院生に刺激を与えたいという平石研究科長の深い意図があつての開催であった。

平石研究科長から与えられた共通テーマは、「21世紀の近代化」を考える」である。趣意書には次のように、このシンポジウムの意図が書かれている。

「近代化」は、「産業革命と国民国家の形成」を尺度として近代化を捉える見方が一般的であるが、それ以外にも様々な議論が存在する。21世紀の現在、近代化によって克服してきた様々な課題が形を変えて、日本においては山積する状況となっている。そこで、「近代化」に対して主に歴史的アプローチを用いて研究された4名がパネリストとして、それぞれの視点で21世紀の現代において必要とされる近代化の教訓や重要な視点などを語っていただきたい。

## 「21世紀の近代化」を考える（シンポジウム）

平石先生から与えられた、「21世紀の近代化」という共通テーマは、とても大きく難しいものであった。このシンポジウムのコーディネーターを平石先生直々に委嘱されて引き受けたものの、とても手に負えないなあとというのが正直な感想だった。多分、この企画のコーディネーターとしては、私は一番ふさわしくない人間である。政治学史という講義を担当していることから明らかなように、専門は西洋の政治思想史である。ここ数年取り組んでいるのは、アテナイ民主政の形成史みたいなことである。日本人なのに、日本史にも日本の近代化の問題についてもまったく不案内な人間である。

先生から投げかけられたテーマを自分なりに消化して、各報告者に依頼するというようなことはできる相談ではなかった。それで、各報告者には、「近代化」あるいは「日本の近代」ということを意識しながらも、自分の博士論文で研究したことをもとに自由に報告して欲しいと頼んだ。もちろん各報告者には、シンポジウムについての平石先生の手になる企画書は渡したので、テーマに沿った報告ができるように、本当にみなさん悪戦苦闘、呻吟しながら頑張ってくれた。その代表が、イルマさんである。「21世紀の近代化」ということで、そもそも本居宣長という、江戸時代の国学者の研究から出発し、本居宣長の目を通して日本文化の特質を探るといふ、きわめて野心的な博士論文を書き上げたイルマさんが、現代日本の技術の粋を極めた東京スカイツリーを報告の題材に掲げて、博士論文で研究した日本の古代天皇制国家と結びつけて論じるという挑戦をしてくれた。

報告者にとってもコーディネーターにとっても大変だったのは、時間である。この第二部は、4人の報告者に司会の僕もいれると5人もいたのだが、与えられた時間はたったの75分である。そこに質疑応答の時間もとる必要がある。ということで、報告者には報告時間10分以内という、とても無理なお願いをした。たった10分の報告で、博士論文のエッセンスを、近代化という視点を踏まえながら報告してくださいという、ある意味無茶苦茶な要求を報告者には突きつけた。報告者各位、準備に本当に長い時間をかけ、頑張ってくれた。報告では、聴衆である学生の便を考えてパワーポイントを使っただけの報告をお願いした。

この企画を平石先生からいただいてから報告者の人たちとは、何度となく会合を重ねた。報告原稿も事前に読ませていただき、パワーポイントを使いながらの報告も実際にしていただいた。報告者は、報告のために膨大な時間をつぎ込んで準備をしてくれた。内容の濃い、いい報告になったと思う。詳細については、私の拙劣な要約よりも、以下、報告者順に報告原稿を掲載にしているので、読んでいただければと思う。

付記：

2016年度のシンポジウムは、政治研究所の独自企画ではなくて、政治学研究所の主催で共催を持ちかけられて行なった。共催の条件の一つが、政治研究所所長の射場がコーディネーターをやるということであり、そして、もう一つが、報告者の業績にするためにも、シンポジウムの発表の政治研究所の紀要への掲載であった。平石先生の、報告者への深い配慮を感じた。

主催が政治研究所ということで、シンポジウムの一切、ポスターの作成掲示、会場の設営、受付の人の配置などの一切を、研究科長の平石先生と研究科主任の上村先生にやっていただいた。記して深い感謝の念を捧げたい。

このシンポジウムのパネリストになっているイルマさんとエリカさんは、本年度から政治研究所の特別研究員になっている。それで、この『政治研究』に論文を投稿しているので、合わせて読んでいただければ幸いである。